

ゲーテと木下杢太郎 皮膚科学との関わりを中心に

Johann Wolfgang von Goethe and Mokutaro Kinoshita
A Poetical-Dermatological Liaison

石原 あえか

I. はじめに 木下杢太郎の森林太郎訳『ファウスト』装釘

今からちょうど百年前の1913年、森鷗外こと森林太郎(1862-1922)は、ゲーテの『ファウスト *Faust*』第一部・二部の翻訳を刊行した。日本文学の分野で谷崎潤一郎、与謝野晶子、田辺聖子から最近では林望の謹訳に至るまで、歌人や作家が紫式部の『源氏物語』現代語訳を試みているように、独文学領域でゲーテの『ファウスト』を翻訳したのは、むろん森に限らない。ただし注目すべきは、この『ファウスト』翻訳者が——作家を兼ねているケースも幾つかあるが——主に日本の大学で教鞭を執っていた独文学者達だった、という事実である。大山定一、相良守峯、手塚富雄、山下肇、柴田翔など枚挙に暇がない。彼ら専門家が繰り返し挑戦した、現在約30種類ある『ファウスト』¹のなかでも、森林太郎訳は今なお高い評価を得ている名訳のひとつである。

ところでこの森訳『ファウスト』、装釘をめぐるエピソードも興味深い²。たとえば、森自身がエッセイ『譯本ファウストに就て』の冒頭で、潔癖すぎるほど不要なものを削ぎ落とした結果、その翻訳にあるまじき失態、つまり「印行本二冊のどこにもファウストの作者ウォルフガング・ギョオテの名が出ていぬと云う事実」を暴露した。だが肝心のゲーテを忘れても、中扉裏には「Buchschmuck von Masao Ota」と装釘者名が記されている。同じエッセイで、森は両巻の扉枠と各頁のデザインを手がけたのが木下杢太郎こと太田正雄(1885-1945)であること、そして「第一部はゴチック、第二部はアンチック」と森から希望を出された太田が、特に前者は「ミュンステルのドオムから」その意匠を考案したこと、また校正も助けてくれたことを述べ、感謝の言葉

¹ 少々古いのが、財団法人東京ゲーテ記念館HPおよび同館刊行冊子『国境を越えるファウスト』(再版2001年)等のデータを参考にした。

² 森林太郎『鷗外全集』、鷗外全集刊行會、1923-1927、第10巻所収。森訳『ファウスト』と木下杢太郎については、岡井隆『鷗外・茂吉・杢太郎「テエベス百門」の夕映え』書肆山田、2008年、p.378以降の「鷗外訳『ファウスト』と杢太郎」に詳しい。ちなみに翻訳刊行時、鷗外は51歳で陸軍軍医総監および陸軍省医務局長を兼任し、対する杢太郎は土肥慶蔵教授が主宰する東京帝国大学医学部皮膚科に入局したての27歳だった。

を記している³。なお本紀要の性質上、皮膚科研究者としての本名・太田正雄より筆名のほうが読者に馴染み深いと思われるので、以下、通例にならない、「空太郎」と表記する。またドイツ語発音の日本語カタカナ表記は、空太郎の時代と現代ではだいぶ違うが（たとえばゲーテのことを空太郎は「ゲエテ」、森は「ギョエテ」などと書く）、作品タイトルや引用は基本的に各原典になった。旧漢字については一部、新漢字に書き改めた部分がある。

さて、伊東の商家「米惣」に生まれた空太郎は、地元の小学校卒業後、東京神田の独逸学協会中学校（現・獨協学園）を経て、第一高等学校（通称・一高）第三部の医科に進んだ。中学では画家を志すも、家族の猛反対により断念。高校時代はゲーテの『イタリア紀行』を愛読し、独文学に転科を望むが、ドイツ語教師・岩元禎から「文科に移ってはならぬ」と諭された。後述する空太郎のエッセイ『ゲエテと醫學』には、

僕は高等學校の時に少しくゲエテに炙し、之を専らにする為めに、學校を退かうと思ったことがある。舎兄が諭して曰ふにはゲエテは生物学を修めたからあの大をなしたのである。爾も其課程を続けなければならぬと⁴。

とあるので、空太郎に強い影響を与え、一高から東京帝国大学理工学部に進んだ技術者の兄・太田圓三（1877-1926）⁵からも説得されたのだろう。ゲーテを愛して転科を望んだ空太郎に、兄が詩人にして官僚かつ自然研究者であったゲーテを引き、転科を思いとどまらせたのは皮肉な成り行きと言えようか。

空太郎とゲーテの文学作品との関係を論じた研究や書籍はすでに存在するが⁶、「夜は文学の仕事」をする空太郎には、本名・太田正雄で行う皮膚科学者としての昼の業務があった。そして空太郎はもちろんのこと、つい先ごろまで——少なくともドイツでの留学経験を持つ世代の日本人皮膚科医の一部では——ゲーテが近代皮膚科の黎明期において、蠟製の標本教材いわゆる「ムラ

³ なお森の『ファウスト』翻訳作業については、空太郎の『鷗外全集翻譯篇後記』にも詳しい（1939年初出、のちに岩波書店刊の『木下空太郎全集』（1981-83）全24巻のうち第16巻再録。なお以後、特に断りがない限り、これを用い、『空太郎全集』と略して、巻数と頁数を記す。

⁴ 『空太郎全集』第15巻（初出は1935年10月の『文藝』）、p.416より引用。

⁵ 空太郎より4歳年上の実兄、学生時代には白山御殿山で同居もし、仲が良かった。土木工学科卒業後、通信省鉄道作業局に入局、工事の機械化や路線の図上選定法を導入するなど、鉄道技術向上に貢献した。関東大震災後は帝都復興院土木局長に任命され、土地区画整理を進め、昭和通りなどの幹線道路を整備するとともに地下鉄の必要性を早くから主張した。震災で壊れた永代橋ほか多くの橋を景観に配慮して架設したのも彼である。汚職事件に巻き込まれ、心労が重なって、45歳で自ら命を絶った。伊東市立木下空太郎記念館の展示「帝都復興の人柱 太田圓三」参照。

⁶ 有光隆司「空太郎詩とゲーテの『イタリア紀行』」、上智文学国文学論集13号、1980年、pp.89-120。また伊東市にある木下空太郎記念館編『目でみる木下空太郎の生涯』緑星社、1981年にも空太郎とゲーテとの関わりは詳しい。空太郎の文学活動については、杉山二郎『木下空太郎 ユマニテの系譜』、平凡社、1974年／野田宇太郎『木下空太郎の生涯と芸術』、平凡社、1980年／新田義之『東北大学の学風を創った人々』、東北大学出版会、2008年ほかを参考にした。また医学業績については特に太田正雄先生（木下空太郎）生誕百年記念会編『太田正雄先生（木下空太郎）生誕100年記念論文集』、1986年、巻末の年表を参照した。

ージュ Moulage」⁷の重要性を説き、その黎明期の試行錯誤を伴う製作を支持・援助したことも知られていた。他方、ゲーテ研究の分野では「ムラージュ」に関する言及がある後期長編小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代 *Wilhelm Meisters Wanderjahre*』（決定稿 1829 年）をはじめ、ゲーテ作品あるいはゲーテ自身と医学に関する研究も進み、うち単著では 1990 年にはナーガーが『医心ある詩人 ゲーテと医学』⁸を、また 1992 年には、ゲーテと医学を研究テーマとするヴェンツェルが図版を豊富に取り入れた『ゲーテと医学』⁹を刊行し、それぞれゲーテと医学の関わりを、文学作品に限らず、実生活や時代背景あるいは医学史などのさまざまな側面から分析・概観を試みた。複数ある『ゲーテ事典』や『ゲーテ便覧』でも¹⁰、「医学 Medizin」の項には、どれもそれなりに詳しい解説が認められるが、皮膚科については言及が皆無——幼少期における天然痘罹患が原因と思われるゲーテのライフマスクに残る痘痕の調査¹¹などは別として——であり、皮膚科医が指摘したゲーテの功績は現在でもほとんど知られていない。本稿では、これまであまり顧みられなかった皮膚科学者としての杳太郎とゲーテの関係にまず注目し、さらに皮膚科教室資料や医学専門雑誌等に掲載された医学者のエッセイ・論文もできる限り考慮して、近代皮膚科学史に貢献した日独ふたりの詩人の影響関係を明らかにしていきたい。

II. 杳太郎が皮膚科医になった経緯 森林太郎と土肥慶蔵

杳太郎は、なぜ皮膚科の研究者になったのだろうか。ここにも杳太郎と森鷗外を繋ぐ不思議な縁がある。杳太郎のエッセイ『森鷗外先生に就いて』によれば、森と初めて言葉を交わしたのは 1907 年 11 月、上野・精養軒で開かれた上田敏博士の壮行会だった。杳太郎が高校時代に英語を師事した夏目金之助〔漱石〕も出席しており、恩師が島崎藤村に紹介される一方で、杳太郎自身は森にシュトルム (1817-1888)¹² やリーリエンクローン (1849-1909)¹³ の詩について話しかけ、

⁷ ゲーテとムラージュの関係についてはドイツ語拙論 *Der Kadaver und der Moulage. Ein kleiner Beitrag zur plastischen Anatomie der Goethezeit*. In: *Goethe-Jahrbuch XLVII* (2005), S.25-39 および *Die Wiederkehr zum ganzen Körper. Goethe als Schüler Loders und die plastische Anatomie*. In: *Universitätsanspruch und partikuläre Wirklichkeiten. Natur- und Geisteswissenschaften im Dialog*. Würzburg (Königshausen und Neumann) 2007, S.243-250、また邦文では「科学と芸術のはざままで ゲーテ時代の大学絵画教師からムラージュ技師まで」、『ドイツ文学』第 146 号 (2013)、東京、日本独文学会、pp.88-102 (ドイツ語レジュメ付) などを参照されたい。

⁸ Frank Nager: *Der heilkundige Dichter. Goethe und die Medizin*. Zürich [u.a.] (Artemis), 1990.

⁹ Manfred Wenzel: *Goethe und die Medizin. Selbstzeugnisse und Dokumente*. Frankfurt a.M. (Insel) 1992.

¹⁰ 具体的には Gero von Wilpert 編 Kröner 社 (1998) および Benedikt Jeßing ら編集の Metzler 社 (1999) の各 *Goethe-Lexikon* および Bernd Witte らによる *Goethe-Handbuch*, Stuttgart/ Weimar (Metzler) 1996-1998 とその *Supplemente Bd.2: Naturwissenschaften*, Hrsg. v. Manfred Wenzel などを参照・確認した。

¹¹ Hermann Cohn: *Goethe über den Impfwang*. In: *Goethe-Jahrbuch 23* (1902), S.216-218 参照。またゲーテと天然痘については拙論 *Goethe und die Pockenschutzimpfung. „Eine Operation, welche der Natur vorzugreifen schien“*. *Hiyoshi-Studien zur Germanistik*. Heft 39 (2004), Yokohama S.1-14 がある。ちなみに Cohn が調査したのは 1807 年作のライフマスク。デスマスクはゲーテが断固拒否したため、存在しない。

¹² 北ドイツ・フーズム生まれのリアリズム詩人・作家、本業は法律家でもある (Hans Theodor Woldsen Storm)。代表作は『白馬の騎士』だが、粹物語『みずうみ *Immensee*』は旧制高等学校のドイツ語教材に使われ、愛読された。

20分ほどドイツ文学について語ったという。しかし杵太郎が森に急接近した、つまり森の自宅・観潮楼の門を叩いたのは、翌1908年10月3日のことだった。その理由は学生にとって単純かつ切実な追試験の嘆願である。杵太郎は、薬物学の高橋順太郎教授の卒業試験日を間違えて欠席、追試験を願うが許されず、最終手段としてとりなしを森に求めたのだった。ちなみに当日催されていた定例歌会¹⁴に飛び入り参加した杵太郎が詠んだ一句が、ゲーテの『イタリア紀行』を踏まえた

十月は枯草の香をかぎつつもチロルを越えてイタリアに入る

だった。これが功を奏したかどうかは不明だが、森は二つ返事で承知、サーベルを佩いた姿で担当の高橋教授を訪ねるも玉砕。20分ほどで退出した森は杵太郎に笑いかけ、不首尾を知らせた。後に「請願といふやうなものは女に限る。男は理で行くから、感情に訴へてしつこく頼むやうなことは出来ぬ」¹⁵と論じたとか、かくして杵太郎の留年が決まった¹⁶。

それから1年、今度は問題なく卒業の見込みが立った杵太郎だが、依然として医学が嫌いで専門が決められず、思い悩む。森に相談すると、提案した精神病学は斥けられ、むしろ生理学を勧められた。だが、今度は杵太郎が首肯しない。すると「土肥慶蔵君の如きはもっとも教授らしい教授のひとりだ」と森が言ったので、それが暗示となって、入門を決めた、と杵太郎は述懐している¹⁷。彼が指導教授に選んだ土肥慶蔵(1866-1931)は、日本における近代皮膚科学の祖に位置づけられるが、日独二か国語で学術書・論文を精力的に執筆する一方、漢文にも造詣が深く、鵜軒の号で自らも漢詩を作る才人だった。またゲーテとの関連でつけ加えるなら、前述した近代皮膚科の教育と研究を支えた標本「ムラージュ」をオーストリア・ウィーンから日本に導入したのは、土肥の功績である¹⁸。

ところで後に杵太郎は『鵜軒先生追悼文集』の発行者を務め、恩師・土肥から「褒められた経験はまるで無い」としながら、2-3回自分が叱られた時の記憶を披露している¹⁹。この文集が編まれた1937年8月、杵太郎は土肥の後継で二代目皮膚科教授・遠山郁三をはさみ、三代目の東

¹³ 北ドイツ・キール生まれの印象主義詩人で Detlev von Liliencron は筆名(本名 Friedrich Adolf Axel von Liliencron)。譜唄・普仏戦争に従軍、一時アメリカに渡ったこともある。戯曲や小説も発表。

¹⁴ この陳情には、『五足の靴』仲間のひとり、平野萬里が付添っていた。またこれが杵太郎初の観潮楼歌会出席となった。この日、石川啄木とも初顔合わせをしている。

¹⁵ 「森鷗外先生に就いて」、『木下杵太郎全集』第18巻 p.87 より引用。

¹⁶ ちなみに新藤晋一は、『医界・文壇稀有の超人 木下杵太郎・太田正雄博士』、杵太郎会シリーズ第15号(1999年)で、追試など通常はさほど拒絶されるものではなかろうに、文壇での活躍により顰蹙を買い、かくも厳しい措置になったのだろう、と推測している。

¹⁷ 「森鷗外先生に就いて」、p.90 より引用。同じエピソードは、次に引用する『鵜軒先生追悼文集』戊戌會、1937年所収の太田正雄名による回想記「我々の醫局に在りし日の土肥先生」、p.214にも紹介されている。

¹⁸ 言語情報科学紀要の前号拙論「日本におけるムラージュ技師の系譜 ゲーテを起点とする近代日独医学交流補遺」、『言語・情報・テキスト』Vol.19(2012)、pp.1-12 参照。

¹⁹ 太田正雄、「我々の醫局に在りし日の土肥先生」、p.214-235。

京帝国大学皮膚科教授に就任したばかりだった。これに因み、同文集には兄弟子・田村春吉(1883-1949)が、土肥と空太郎の師弟関係について短い回想文を寄せているので、その内容を簡単に紹介しよう。

あえてドイツではなくフランスに留学(1921-1924)した空太郎は、帰国後、伝染病研究所(略称「伝研」)で働くのを第一希望とし、第二を慶應義塾、第三を名古屋と考えていた²⁰。1922年夏、空太郎はパリからリヨンに研究拠点を移し、リヨン大学の植物学者ランジェロン(Maurice Langeron 1874-1950)と——1970年頃までカビは植物とされていた²¹——真菌分類法の研究を開始していたから(1923年10月完成、国際的に高い評価を受ける)、帰国後も真菌学を研究したいと望んだのは不思議ではない。だが当人不在の間に、伝研所長の長與又郎(1878-1941)²²が土肥を訪ね、空太郎の希望を伝え、「囑託でよければ伝研へ入れる事ができるが」と承諾を求めたために、少々拙いことになった。「太田君〔空太郎〕は不都合者だ」とプンプン怒っている土肥を、「太田君は男にほられるひとなんです」と田村はなだめた。その言葉に土肥は不承不承肯きつつ、「自分は太田君に一生皮膚科学者として立ち居てもらいたい」と漏らし、講座制をとっていなかった県立愛知医大〔名古屋大学医学部の前身〕に先に着任していた田村と皮膚科教授のポストを分けるように頼んだという。土肥の願いは叶えられ、また空太郎も土肥の指示に従ったので、1924年10月、空太郎は愛知医科大学教授に就任した。この後、彼はさらに東北大学医学部教授を経て、1937年に母校の皮膚科教授に着任したのである。

Ⅲ. 皮膚科医が読む『イタリア紀行』 ゲーテとペラグラ

1932年はゲーテ没後100年の節目の年で、これに因んで空太郎もゲーテに関する2編のエッセイを発表した。最初のひとつは青年時代の愛読書『ゲーテの伊太利亜紀行』を扱ったものだった。その冒頭を引用する。

若し僕が今、文科大学の学生であつたとしたら、ゲーテが伊太利亜紀行を卒業論文の題目として選んだであろう。然しその場合には之をゲーテが自叙伝——その内生活発達史の一部として見るのでなく、当時の文芸批評の標準、殊にゲーテが参考にした各種の伊太利亜に関する評論——さう云ふ層から、如何にゲーテが遊び出して、自分固有の見解を作ったか、また伊太利亜の地で新に得た友人たちからどれだけ影響せられたか。(・・・)然しこの研究には中々手間がかからう。文科大学の学生でもない——時間の余裕が十分ある身でないと、企てかねるのである²³。

実父を通して幼いころからイタリアへの憧憬を強くしていたゲーテが、ようやく憧れの地への旅に踏み切ったのは、37歳の時だ。1775年以降出仕したヴァイマル宮廷の人間関係の狭さ、公

²⁰ 木下空太郎記念館編『目で見る木下空太郎の生涯』、緑星社、1981年、p.88ほか参照。

²¹ 小野友道『太田正雄&木下空太郎 医学の業績、そして五足の靴』空太郎会シリーズ第25号、2010年、p.12参照。

²² 空太郎との関係については、追悼文「長與又郎先生」、『空太郎全集』第17巻、pp.410-412参照。

²³ 『空太郎全集』第14巻(初出は『セルパン』第13号、1932年3月)、p.376より引用。

務に追われて思うように文学活動ができない焦燥、また家庭のあるシュタイン夫人とのプラトニックな恋にも限界を感じていたゲーテは、極秘で周到に旅行準備を進めた。機は熟し1786年9月3日未明、37歳の誕生日を祝ったばかりの彼は、当初主君カール・アウグスト公(1757-1828)にすら行き先を告げることなく、ご丁寧にも画家フィリップ・メラーなる偽名まで用いて、湯治先のカールスバート(現在はチェコの高級保養地カルロヴィ・ヴァリ)を発ち、イタリアに逃避したのだった。それから1788年6月18日にヴァイマルに戻るまでの約2年足らず、ゲーテは南国で過ごし、見事な再生を遂げた。イタリア体験は彼の人生の重要な転換点となり、この後、ドイツ古典主義文学の時代が幕を上げる。絵画・彫刻・建築など古代芸術に開眼し、『エグモント』²⁴、『タッソー』、『イフィゲーニエ』などの戯曲作品を次々と完成させる一方、パドヴァの植物園で「原植物 *Urpflanze*」の着想を得たり、ヴェスヴィオ火山登頂をはじめ地質学研究にも従事したり、自然科学分野でも大きな収穫があった。『イタリア紀行 *Italienische Reise*』の第一・二部は、還暦を過ぎたゲーテが当時の日記や手紙などの資料をもとに、『詩と真実 *Dichtung und Wahrheit*』を含む自伝的プロジェクトの一環として再構成したもので、1816年から1817年にかけて発表された文学的旅行記である²⁵。

この『イタリア紀行』を初めて読んだ高校時代を、空太郎は彼の『ゲーテの伊太利亜紀行』で回想している。一晩かけて空太郎に転科を思いとどまらせたドイツ語教師・岩本は、授業で2年かけて『イタリア紀行』原書の大半を講読した(空太郎の教科書には1904年9月12日の日付が記されていた)。生徒のごく一部にとって、この作品は「感激の源」となり、「夕日を受けた品川の瓦斯タンクはサン・ジョルジョ・マジョレと思い倣され、兜橋の渋沢事務所はカ・ドロを幻想せしめた」²⁶という。このエッセイ執筆時46歳の空太郎が、最初の読書体験から30年近くを経てなお、『イタリア紀行』への熱狂と執着を吐露しているのは、瞠目に値する。

空太郎青年の『イタリア紀行』への傾倒は、作品の熟読にとどまらなかった。ゲーテにとってのイタリアに代わる、日本国内での「教養旅行(グランドツアー)」を彼は必要としたのだ。しぶしぶ東京帝国大学医科大学に進んだ翌1907年夏、彼は与謝野寛[鉄幹]の引率で、平野万里、北原白秋、吉井勇とともに7月20日から約1ヶ月、九州を旅した。ただしこの旅の実際の案内役は空太郎だった。彼は『イタリア紀行』を念頭に置き、かつてゲーテが十分な知識を蓄えてからアルプス越えをしたように、事前に図書館でキリシタンの歴史や天草騒動に関する書籍を漁り、訪問先やスケジュールを入念に練った。結果、かなりの強行軍になったようで、後に同行者のひとり、吉井に「私たちは、空太郎君に引きずられてついて行ったのです。ほんとうにしんどかった」と語らしめている²⁷。空太郎と交流のあった詩人で文芸評論家の野田宇太郎(1909-1984)が指摘する通り、この時の空太郎にとって、間違いなく「九州は云わばイタリアでもあった。長崎や平戸は羅馬でありフィレンツェでもあった。そして天草はシシリアであった」²⁸。こ

²⁴ ゲーテ作品では、戯曲『エグモント』と自然科学論文『上顎の間骨は動物と同じく人間にも認めらるべきこと』を空太郎はドイツ語から翻訳している。いずれも『空太郎全集』第19巻所収。

²⁵ 『イタリア紀行』第三部は第二次ローマ滞在を扱い、性質が異なる。

²⁶ 『空太郎全集』第14巻、p.377参照。

²⁷ 小野友道編『木下空太郎と熊本「五足の靴」天草を訪ねる』、第101回日本皮膚科学会総会編、熊本日日新聞社発行、2003年、p.24(濱名志松、『私と「五足の靴」より』ほか参照)。

の1907年夏の九州旅行は、まず同行者たちとの共同紀行文『五足の靴』となった。また帰京後、空太郎は南蛮詩を書き始める。

ちなみに空太郎のゲーテ巡礼の旅について言えば、1923年1月にエジプト・イタリアを旅行し、ヴェネツィアでは偶然ゲーテと同じ旅館に泊まっている。また同年、かつてゲーテが学んだシュトラースブルク大学での皮膚科学会出席後、フランクフルト・アム・マインにあるゲーテの生家（第二次世界大戦の爆撃で崩壊、現在のフランクフルトにあるゲーテ・ハウスは再建したもの）の訪問も実現した。

さて、空太郎の『ゲーテの伊太利亜紀行』に戻ると、ここに皮膚科学的な所見は見当らない。けれども彼がこのエッセイを書いた頃、具体的には1929年以降、オーストリア系皮膚科学者リレ（Johann Heinrich Rille 1864-1956）が、ゲーテがイタリア旅行中ペラグラを発見したことを指摘した。この報告を、空太郎同様、熱烈なゲーテファンだった皮膚科学者・上野賢一（1927-2012）が日本語で紹介している²⁹のだが、これまた皮膚科関係者が読者の雑誌・書籍に掲載されていて、日本のゲーテ研究者の目に留まることは皆無である。空太郎と直接関係はないが、ゲーテの自然科学的観察眼の鋭さを示す部分でもあるので、以下、簡単に紹介する。問題の箇所は、まだ旅の序盤、ブレンナー峠を越え、ゲーテがイタリアに入った直後、1786年9月14日付の記述である。

人間のことでお話しできることと言えば、ほんのわずかしかないし、面白い話はほとんどないと言ってよかろう。ブレンナー峠から下って行くうちに夜が明けて、早速人間の風貌がすっかり変わっているのに気づいた。特に女性たちの褐色だが青白い顔色が気に入らなかった。その容貌は困窮した生活を物語っていたし、子供たちも同様に惨めな顔つきだったが、男性たちは少しましな様子だった。とはいえ体格は正常で文句のつけどころがなかった。病的症状の原因はトウモロコシや蕎麦を常食としている点にあるようだ。前者は黄ブレンド、後者は黒ブレンドとも呼ばれるが、挽いた粉を溶き、粘りのある粥状にし、そのまま食する。峠向こうのドイツ人はこの生地をちぎってバターで揚げるが、こちら南チロルの人々は粥のまま食べてしまう。時にはチーズを振りかけもするが、一年を通して肉を口にすることがない。必然的にこれが体内に入ると、食道に貼りつき、胃腸を塞ぐから、特に女子供においては、そうした弊害が全身衰弱や貧血を伴う悪液質の顔色に出るのだらう³⁰。

トウモロコシや蕎麦を使った粥状の食べ物とは、小麦栽培に向かない北イタリアで主食とされたポレンタのことだらう。そしてゲーテが眉を顰めた女性および子供たちに顕著な病的顔色は、

²⁸ 野田宇太郎、「輝きはじめた南蛮の言葉」、小野編『木下空太郎と熊本』p.92より引用（初出は『パンの會 近代文藝青春史研究』、昭和24年）

²⁹ リレは1929年にソフィアとベオグラードの医師会で、翌1930年にはベルリン皮膚科学会でペラグラの発見者・ゲーテについて講演した。上野賢一が『皮膚科の臨床』に連載した随想シリーズ *Von Dem Grau Bis Zum Bunt* [大文字・小文字表記は原文ママ] のうち79番（2000年）Goethe und Pellagra, p.1028参照。このシリーズはもとよりゲーテに関する複数のエッセイは上野賢一 [私家版]『夕映えの髷』、岩波出版サービスセンター、2007年に再録されている。

18世紀後半、北部イタリアの風土病とされた「ペラグラ (Pellagra: イタリア語の「粗い皮膚」に由来)」の症状と一致する。ペラグラは大雑把な言い方をすれば、ニコチン酸の代謝異常、言い換えればナイアシンすなわちビタミンB₃欠乏症である³¹。手や顔にゲーテが記した褐色の色素沈着を伴う特徴的な皮膚炎が現れ、下痢や認知症・神経錯乱などを伴う。もっともゲーテの時代、病気の原因は不明だったし、ゲーテ自身は「ペラグラ」なる言葉自体を知らなかったはずだ。先に引用したテキストで、粘着性のトウモロコシの粥が胃腸にへばりついて栄養吸収を阻害する、というゲーテの発想は——巷で言う「牛乳を飲んでおくと胃の粘膜をコーティングするから悪酔い・二日酔いに効く」という俗説に酷似している——面白いが、誤りである。

空太郎の師・土肥慶蔵は『皮膚科学』(1910年)で、ペラグラはトウモロコシを常食とする人々の病だ、という見解を示している。その後1926年にハンガリー出身のアメリカ人医学者ゴールドバーガー (Joseph Goldberger 1874-1929) が、人間および犬のペラグラ (黒舌病) は何らかの栄養不足が原因であることを突き止め、さらに1937年になってエルヴェージェム (Conrad Elvehjem 1901-1962) がその物質がナイアシンであることを発見した。近年あまり見かけなくなったが、たとえば無理なダイエットや慢性アルコール中毒症の患者には今でも発症例が報告されている。

ペラグラと同じビタミンB群代謝異常で、現在激減した病気に脚気がある。こちらは空太郎が敬愛した森林太郎 [鷗外] が高木兼寛 (1849-1920、東京慈恵医科大学の創設者) と脚気論争を繰り広げており、たとえば吉村昭 (1927-2006) の『白い航跡』(1991) に文学化されている。吉村の小説は後者・高木の視点に立って描かれているが、当時、陸・海軍ともに大量の死者を出し、深刻な問題となっていた脚気をめぐって、ドイツ帰りの陸軍医・森は「細菌原因説」を説いた³²のに対し、海軍医・高木は「食物原因説」を主張した。イギリスで実用医学を学んだ高木

³⁰ ゲーテ原典は *Johann Wolfgang Goethe. Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Münchner Ausgabe. Hrsg. v. Karl Richter in Zusammenarbeit mit H. G. Göpfert, N. Miller, G. Sauder und E. Zehm. 20 Bde. in 32 Teilbänden und 1 Registerband. München (Carl Hanser) 1982-1998 を用いた。以下、同全集からの引用は略称 MA とともに、巻数・頁数のみ記す。引用文は MA 15, S.40 より著者が日本語に訳した。なお、これに続く1文に「他に彼らは果物やインゲンに湯通ししたものをニンニクと油で炒めて食する」とあるが、次節とも関係する文中の「ニンニク Knoblauch」は、改造社版『ゲーテ全集』第17巻 (1936) および岩波文庫の相良守峯訳および潮出版第11巻の高木久雄訳『イタリア紀行』では「葱」と誤って訳されている。他方、それ以前の『イタリア紀行』邦訳は、隆文館刊の高木敏雄訳 (1914) は「大蒜」、大村書店第13巻 (1924) の吹田順助訳および聚英閣版第10巻 (1925) の岩崎真澄訳もそれぞれ「蒜」と、正しく訳出されている。しかもテキスト引用箇所は違うが、『滞仏陣中記』文中のニンニクを空太郎も「玉葱」と誤訳しており、疑問が残る。これらの誤訳箇所をめぐっては、慶應義塾大学名誉教授・岩崎英二郎先生および上智大学名誉教授・木村直司先生からの貴重なご教示に感謝する。

³¹ 西川武二監修『標準皮膚科学』、医学書院 (2007年、第8版) p.375 ほか参照。

³² 森と脚気については、山本政三『鷗外森林太郎と脚気論争』、日本評論社、2008年など複数の研究がある。たとえば森が第二軍軍医部長として出征した日露戦争で、陸軍は戦死傷者約20万人に対し、脚気患者は約25万人を出した。2012年に文京ふるさと歴史館で行われた特別展『洪庵、知安、そして鷗外 近代医学のヒポクラテスたち』展示図録 p.38-39 掲載の吉田愛のコラム「臨時脚気病調査会と軍医・森林太郎」に背景と経緯がコンパクトにまとめられている。高木についても同図録 p.33 のコラム (参考文献リスト付) を参照されたい。

は、二隻の練習艦を使って異なる食事を提供する比較実験を行い、航海中、パンや麦飯を提供された艦よりも、白米を食した艦に多くの脚気患者が出たことを確認した。この時、高木は蛋白質が鍵を握っていると推測したが、実際はオリザニンすなわちビタミンB₁不足が原因だった。すでに1912年、東京帝国大学農学部教授・鈴木梅太郎（1874-1943）が米麴に含まれるアベリ酸からオリザニンを発見していたが、臨時脚気調査委員会がようやく「脚気の原因はビタミンBの欠乏」と確定し、解散したのは森の死後3年を経た1924年のことであった。

Ⅳ. 空太郎のエッセイ『ゲーテと醫學』

『ゲーテと醫學』もまた1932年に空太郎が発表したエッセイである。青年期から変わることないゲーテに対する空太郎の深い愛情と憧憬がうかがえる文章だが、ヒトの顎間骨発見³³や晩年のパリ・アカデミー論争³⁴への関与はともかく、よほどゲーテと自然科学の関係を調べている研究者でなければ耳にしない化学指南役「デエペライネル」³⁵の名まで、さりげなく文中に登場するのはハッとさせられる。また本エッセイにもリレによるゲーテのペラグラ観察の指摘同様、ドイツ文学研究者なら見過ごしてしまうであろう皮膚科医らしい読み方が随所に認められる。

たとえばゲーテが神経過敏で天候等に体調が左右されやすかったことは、よく知られているが、空太郎はこのエッセイで、「ゲーテが玉葱に特別な病的素因を有している」ことも指摘した。「病的素因」に「イデオジンクラジイ [現代表記はイデオジンクラジー]」と振ってあるが、今なら特定の植物や化学物質・薬物に過敏反応を示す「特異体質」と訳するのが一般的だろう。この文脈では、「食物アレルギー」とも言い換えられる。以下、続きの文を引用する。

仏蘭西兵の占領（九月六日の日記）中或る饗宴で玉葱の皿が出た。他の料理は甚だ結構であったが、何だか毒でも交っている様な気がして不快感を起したが、それが玉葱の故である事とく感知して、大した事にはならなかった。其皿は玉葱故に美味となったのであるが、ゲエテには微量の玉葱も強烈な作用を為すものであった。其他過熟或は腐敗しかけた林檎はシルレル [シラー] には好物であったが、ゲエテには大毒であったといふ。このイデオジンクラジイといふ現象はこの十年二十年この方は甚だよく研究せられて、病理学上の重要な項目となったが、無論ゲエテの時代には、其事實は知られてゐても、其原因に関する知識ははっきりとしてゐなかつた。³⁶

³³ 詳しくは拙論 *Von der Skala der Natur zum evolutionären Vektor. Der Zwischenkieferknochen und das Affen-Motiv in der Literatur der Goethe-Zeit*. In: Neue Beiträge zur Germanistik. DOITSU BUNGA KU. Bd.3, Heft 3 (2004), S.144-158 参照。ただし人間（成人）では痕跡器官となっており、顎間骨は存在しない。「ゲーテ縫合」とも呼ばれる。

³⁴ 詳しくは拙論「パリ・アカデミー論争（1830）ゲーテ『動物哲学の原理』をめぐる一考察」、『モルフオロギア ゲーテと自然科学』第22号（2000）、ナカニシヤ出版、pp.2-11 参照。

³⁵ Johann Wolfgang Döbereiner (1780-1849)、現代表記では「デーペライナー」となる。プラチナの研究で有名で、その延長で「プラチナライター」を発明。詳しくは拙論「ゲーテの化学指南役たち」、シェリング協会編『シェリング年報』20号（2012）、こぶし書房、pp.60-69 参照。

³⁶ 『空太郎全集』第15巻、p.408 以降引用。

こちらゲーテが年下の主君カール・アウグスト公に命じられ、1792年に渋々従軍・同行した時の回想を1820年から2年近くかけてまとめた『滞仏陣中記 *Campagne in Frankreich*』(1822)からの記述で、興味深い指摘ではあるが、致命的な誤訳がある。なぜなら原典には「玉葱 Zwiebel」ではなく「ニンニク Knoblauch」を使った料理で気分が悪くなった、と明記されているからだ³⁷。すなわち1792年9月6日、ヴァイマル公率いる連隊は、ヴェルダン市に近いジャルダン・フォンテーヌ村に宿をとった。その宿泊先の主人が昔ドイツでコックをしていた男で、ヴァイマル公専属料理人が同行しているにもかかわらず、自ら厨房に立ち、腕によりをかけて一行を饗応した。その料理にニンニクが使われていたのだ。ゲーテは胸のむかつきを覚え、吐き気を催した。一瞬、服毒の疑いが頭をよぎったらしい。だが、これまでも彼が口にするると激的な症状を引き起こした犯人・ニンニクを認め、事態は収拾されたとのことである。

ちなみに玉葱に関して言えば、ゲーテが住んだ町ヴァイマルは、その伝統を中世まで遡れる「玉葱市 *Zwiebelmarkt*」(現在も10月開催)で有名で、ゲーテも毎年、玉葱を編みこんで作った実用装飾品「玉葱編み *Zwiebelzopf*」(窓や壁に吊るし、料理の際には一玉ずつもいで使える三つ編み状のオブジェ)を買って求めて楽しんだ記録が残る。また余談になるが、ベビーワインとでも訳すのか、発酵途中の白濁した新葡萄酒(*Federweißer*)と一緒にいただく、アツアツの「玉葱ケーキ *Zwiebelkuchen*」もゲーテの時代から変わることなきヴァイマルの秋の風物詩である。

玉葱ならぬ「ニンニク」への拒否反応に続けて、「過熟或は腐敗しかけた林檎」についての言及があるが、これも空太郎がどこかで聞きかじり、うろ覚えのまま書き綴ったものらしい。実際の正しいエピソードは、エッカーマンとの対談記録『ゲーテとの対話』の1827年10月7日で確認できる³⁸。こちらシラー³⁹が原稿執筆中、腐った古い林檎の臭いを嗅ぐのを常としていた——眠気覚ましという説、あるいはこの臭いこそシラーにとっては創作活動を促す香り、即ち執筆に不可欠なインスピレーションのもとだったという説もある——のだが、そんな悪臭の塊が仕事机の引き出しにあることを知らず、机を借りて書き物をしながら、当人の帰りを待っていたゲーテはだんだん気持ちが悪くなり、ついには卒倒寸前までいった、という回想である。つまり両詩人とも腐敗しかけた林檎を食したわけではない。

さらに『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代 *Wilhelm Meisters Lehrjahre*』で重要な役割を果たす女性登場人物テレゼが主人公ヴィルヘルムに來し方を語る場面で、彼女の実父の病状描写であるところの——これまた空太郎は「蛇 *Schlange*」と綴りを見誤ったのか「蛇咬」と誤記しているが、「脳梗塞 *Schlagflusse*」(*Schlaganfall*と同義、原典はMA 5, S.451)が正しい——右半身麻痺と言語障害が、当時の医学的見地からもかなり正確だという指摘がある。

ゲーテ作品との齟齬は、『ゲエテと醫學』で断っているように、夜だけ詩人に戻る空太郎が、時間の余裕が十分ある身ではなかったのが原因だろう。ここで彼は、

³⁷ Goethe: *Campagne in Frankreich 1792*, MA 14, hier S.367.

³⁸ Johann Peter Eckermann: *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens*, MA 19, S.587.

³⁹ Johann Christoph Friedrich von Schiller (1759-1805). ドイツの詩人・劇作家にして歴史家。ちなみにゲーテが大学で法学部を修めたのに対して、シラーは医学部を卒業している。日本で年末恒例に演奏されるベートーヴェンの『第九』交響曲の合唱歌詞「歓喜に寄す *An die Freude*」は彼の頌歌。

ゲエテは自然科学に於ける偉大なるディレクタントであった。このことが其文学を深厚にもし、多面的にもした。我々も青年時代にゲーテ耽溺の期間を経過したが、殊に醫学生であった僕はゲエテのこの方面の見識から多大の啓発を受けた⁴⁰。

とも書いているが、これは逆方向でも正しく当てはまる。空太郎はゲーテ研究における偉大なディレクタントだった。だが、彼の医学研究者ならではの視点や解釈から、文学研究者が学ぶことは多いのである⁴¹。

V. 仮の結び ゲーテの形態学と空太郎

亡くなる2週間ほど前、空太郎は不治の病の床で、

「僕は『木下空太郎』と云ふ長編小説が書いてみたい。それは北原白秋や吉井勇とは全く違った環境から文学を考へた自分として、キルヘルム・マイステルのような小説を書きたいのだ」⁴²

と見舞いに来た野田宇太郎に語った。1925年春、『改造』に発表した『口腹の小説』の悪評を気にした空太郎は、この作品を未完のまま終えてしまい、以後、二度と小説を書かなかったから、この言葉は意味深長に響く。

ドイツ教養小説 (Bildungsroman) というジャンルを語る時、絶対に回避できない作品が「キルヘルム・マイステル」、即ちゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』シリーズである。その『徒弟時代』冒頭で、裕福な商人の息子ヴィルヘルムは、シェイクスピア作品の多大な影響のもと、俳優になることでの自己陶冶を夢見る。しかしさまざまな人との出会いや経験を通して、続編『遍歴時代』では、自らの意志で、数ある職業から外科医になることを選択する。作品最後では溺死しかけた息子を自らの外科的処置によって救い、自己実現を果たす。

先に触れた『ゲエテと醫學』の後半で空太郎は、18世紀後半には、類人猿にはあるが、ヒトにはないと考えられていた顎間骨の発見や原植物の構想など、ゲーテの形態学 (Morphologie) での研究成果を詳しく紹介・評価している。そして皮膚科学者としての空太郎もまた優れた形態学者であった⁴³。特に真菌学の分野で緻密な顕微鏡観察と形態学にもとづく『皮膚糸状菌の新分

⁴⁰ 『空太郎全集』第15巻、p.403より引用。

⁴¹ 本論とやや外れるが、空太郎のエッセイと同じタイトル『ゲーテと医学』の単著を産婦人科医で大阪大学教授の藤森速水が1964年、朝日出版社から刊行している（現在は絶版のため入手困難）。100頁余の薄い書籍だが、当時のゲーテと医学に関する研究成果を網羅しており、本論冒頭で紹介したヴェンツェルやナーガーの研究書に先鞭をつけた専門の内容を多く含む。序文には著者・藤森がかねて薬学関係の雑誌に連載していたエッセイを、還暦を機にまとめた経緯が記されているが、この出版を特に促したのが、空太郎と同じく一高の卒業生である医学者・勝沼精蔵（1886-1963、空太郎とほぼ同学年？）であったという。勝沼からの著者宛書簡には「ゲーテは夏目漱石先生にすすめられて一高、大学時代にその全集をよみ、大きな御蔭を乞うた人」と記されていた。空太郎に限らず、医学者への影響関係は、日本におけるゲーテ受容史を語る上で注目すべきテーマのひとつである。

⁴² 小野友道編『木下空太郎と熊本』、p.92より引用。

類 *Nouvelle classification des dermatophytes*』を発表した。空太郎がフランス留学中、最初に師事したパリのサン・ルイ病院——皮膚科ムラージュの歴史的コレクションでも有名——のサブロー (Raymond Sabouraud 1869-1938) は大著『白癬 [あるいは糸状菌症] *Les teignes*』を著し、独自の白癬菌分類体系を発表していた。だがその分類に対しては、感染組織内の観察形態を重視しすぎているという批判があった。この問題を踏まえ、空太郎はランジェロンと、本来の発育形態学的に、より正統で新しい分類体系を作りあげたのである。

本稿では仲介者役の森鷗外にも触れながら、ゲーテと空太郎という、活躍した場所も時代も異なるふたりの詩人の間に作用する不思議な「親和力」を、幾つかの例を挙げながら明らかにしようとした。しかし本郷の東京大学医学図書館には、まだ整理が終わっていない空太郎のドイツ語を含む遺稿や書簡、皮膚科関連のスケッチや写真などが残る⁴⁴。それら貴重な一次文献を調査し、皮膚科医としての空太郎やゲーテあるいはドイツとのつながりを検証していくことを、今後の研究課題のひとつとしたい。

謝辞

本論執筆にあたっては、多くの方々に貴重な歴史的資料の提供や閲覧をはじめ、さまざまなご協力・ご教示を賜りました。なかでも慶應義塾大学医学部名誉教授 西川武二先生、名古屋大学総合博物館 西田佐知子先生、同館 野崎ますみ様、東京大学大学院医学系研究科・皮膚科学教授室 Boezeman 肥田ひとみ様、東京大学医学図書館 大西由佳子様については、お名前をあげてご協力に心からお礼申し上げます。

⁴³ 山口英世『わが国医真菌学の祖 太田正雄先生』、空太郎会シリーズ第16号、2001年／福代良一「太田正雄先生の医真菌学領域における業績について」、西川武二編『日本皮膚科学会第100回総会記念特集号』日本皮膚科学会雑誌 第111巻第4号 [保存版]、2001年、pp.625-630／山口英世監修・アイカム製作のビデオ「医真菌学の歴史を訪ねて 太田正雄と真菌研究」、1996年(?)も参考にした。

⁴⁴ 再発見の経緯については、村田武『顕微鏡画など新発見の資料等からわかること』、空太郎会シリーズ第26号、2011年を参照されたい。